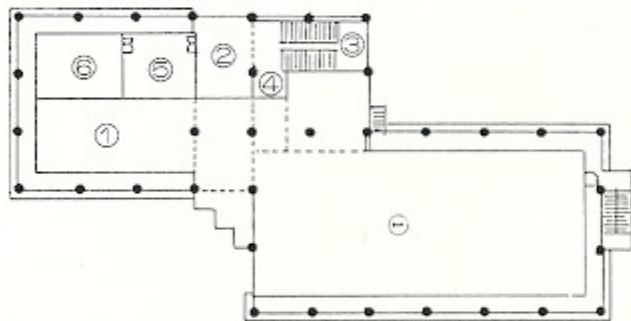




展示室

美術館の平面図



3階	590.76㎡
①展示室	453.971
②ロビー	28.462
③階段	40.5
④エレベーター	4.79
⑤館長・応接室	28.187
⑥収蔵庫	34.85

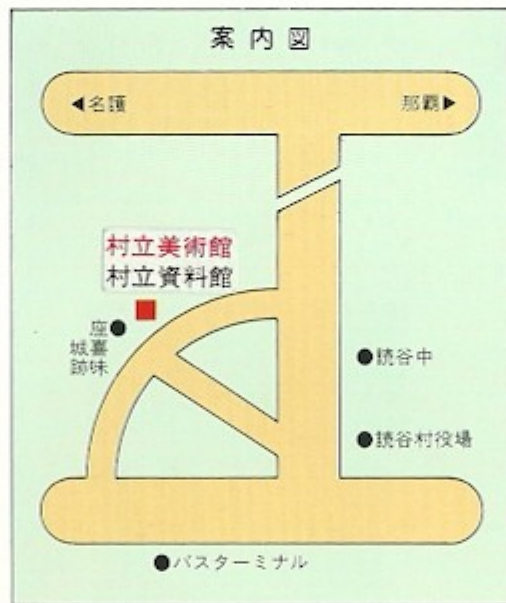
おことわり

1. 館内では許可なく写真撮影を行わないこと。
2. 展示品に手を触れないこと。
3. 他人の観覧の妨げになるような行為はしないこと。

利用案内

- 〈開館時間〉 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
 〈休館日〉 毎週月曜日・公休日
 年末年始(12月29日～1月3日)
 〈観覧料〉 村立歴史民俗資料館窓口にて共通
 (大人50円 小中高生30円)
 ※企画展示室をご利用されたい場合は
 お電話にてお問い合わせ下さい。

案内図



○交通 那覇ターミナルから
 ◎喜名経由読谷線で60分
 座喜味下車、徒歩5分

表紙：金城次郎 魚紋壺

読谷村立美術館



読谷村立美術館

YOMITAN ART MUSEUM

所在地 〒904-03 沖縄県読谷村字座喜味708-6
 電話 (09895) 8-2254



御案内

古城、座喜味城跡の麓、東シナ海を一望し、のどかな田園風景がひろがる中、読谷村立美術館は平成2年(1990)3月に開館いたしました。昭和50年(1975)県内に初めて設立された歴史民俗資料館と併設になっており、その3階が展示室になっております。

四方を海に囲まれた沖縄は、14~15世紀頃から中国大陸や南方諸国と交易を行い、それぞれの地域の特色文化を導入し、消化することにより発展してきました。読谷は、天然の良港をひかえ、そこを拠点に外来文化の入口として栄え、ひとつの地方文化圏を形成し、今に伝わる読谷山花織や焼物といった伝統工芸が読谷の地に深く根ざしております。歴史と創造的技術の伝統をさらに育みながら、小粒ながらも、地元に着目させた美術館として、織物や焼物を中心に作品の収集に努め、文化村としての様々な活動の中核をなすことを使命とした美術館に築きあげていくべきものであります。

また年数回の展示替えと、時宜に応じた企画展を行い、学術、学校教育、社会教育の一助とし、審美の眼と心を育み、より高い文化への道を求めるべきものであります。



「抱瓶」金城 次郎



織物

読谷山花織

読谷山花織は、南方貿易の盛んな15世紀の初め頃、南方から伝来したといわれる幾何学文様の織物です。白、赤、黄、緑等の糸で浮き織りにされている文様は南国の情熱的な色彩を表現し、図柄は咲き誇る花のように美しいところから花織の名称がつけられています。明治の中期頃に一時途絶えていましたが、1961年から村がその復興に力を注ぎ、1964年には技術の復興をみました。

焼物

読谷村における焼物の歴史は古く、沖縄の焼物の初まりは、読谷山からだともいわれ、それは17世紀にさかのぼります。最初は、読谷の喜名というところで壺や擦り鉢などが焼かれていました。これが、沖縄で最も古い焼物(やちむん)のひとつである「喜名焼」です。明治の初期から昭和17年頃、村内に登り窯があり主に、瓦や油壺、厨子壺などがつくられていました。

昭和47年那覇市壺屋から座喜味横田屋原に人間国宝の金城次郎氏が、登り窯を築いて以来次々と陶工が集まり、昭和55年赤瓦屋根を連ねた九連房の共同窯ができ、そこから素朴な美しさをたたえた温みのある「読谷山焼」が生まれています。



「大皿」上江洲茂生



北村 英子「沖縄爆音の街」

